

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：16401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653303

研究課題名(和文) 異文化理解マインドの創出と相互国際教育実習研究

研究課題名(英文) Nurturing Intercultural Minds through International Teaching Practice

研究代表者

谷口 雅基(Taniguchi, Masaki)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：90163633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：言語文化、英語教育、環境教育を中心に、諸外国の国際理解と異文化理解を目的とした異文化マインドの創出を探り、英語を教える教員はもとより、他の教科を教える教員も、「英語が使える日本」として育成するため、ベトナム国、韓国、中国で言語、文化、環境教育について国際教育実習を試行、また高知大学でシンポジウムを実施した。「国際化時代に即応した国際コミュニケーション力と異文化理解力を持った教員の養成」及び「アジア諸国の教員養成モデルプログラムの共有化」を模索した。異文化に触れることで、教員志望学生の異文化理解マインドを育て、国際的視野と文化の違いを超えて諸外国を知ろうとする心構えを築く事ができたと思われる。

研究成果の概要(英文)：In this research project, international teaching practice was conducted in Vietnam, Korea and China with the aim of facilitating, for students participating in Kochi University's teacher training courses, the development of intercultural perceptiveness with special attention to English language and environmental studies. In addition, a symposium on intercultural communication took place at Kochi University. Taken together these have contributed to the aim of helping future teachers to develop competence in international communication and constituting contributions to the development of teacher training programs in Japan and the countries referred to. It is believed that the participating students have greatly benefited from this project by learning the importance of understanding the similarities and differences between cultures, thus preparing them to be suitably interculturally-minded teachers in the future.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国際教育実習 異文化理解 英語が使える日本人 異文化理解マインド 国際協調 世界平和 環境教育

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景は、次のとおりである。

2005年3月26日から4月9日まで約2週間、高知大学教育学部蒲生啓司教授の指導のもと、高知大学教育学部・大学院教育学研究科の教員2名と学生8名は、2004年度 ACCU ユネスコ青年交流信託基金事業「大学生交流プログラム」によりベトナムに派遣された。目的はベトナムにおける世界遺産視察、ハノイおよびホーチミンの小学校から大学までの学生との文化交流を通じて、学校教育における世界遺産の教材化への提言や、環境教育プログラムとしての新しい授業内容の提言を見出すことにあった。また2008年度～2010年度日本学術振興会科学研究補助金挑戦的萌芽研究の課題番号[20653074]に採択され、ベトナム国ハノイ市のロモノソブ初等中等高等学校にて毎年一回、教育学部の英語と理科の学生による国際教育実習を行った。さらに、2011年度～2013年度日本学術振興会科学研究補助金挑戦的萌芽研究の課題番号[23653303]に採択され、ベトナム国ハノイ市のロモノソブ初等中等高等学校、大韓民国のサンミョン中学校および中国の安徽大学において毎年一回、英語と理科等の学生による国際教育実習を実施した。本研究は、国際文化交流と環境教育を基軸として、将来教員を目指す学生が、

(あ) 国際文化交流、環境教育の重要性を認識し、それを生かした教育現場作りを心がけること、

(い) その上で自身の専門性、人間的幅を拡大し異文化マインドを創出することを目指している。

現在の教育現場で、他のアジアの国々についてどれほど理解があるであろうか。例えば世界文化遺産の歴史的意義や文化、環境教育の現状など、アジアの一員として認識すべきであることが断片的にしか理解

されていない。日本とアジアの国が経験、活動、認識を相互に交換し合うことで、理解が深まるばかりか、これからの環境教育のあり方、アジアのあり方を考えることが可能となる。このことが世界平和に与える影響は非常に大きいと言えよう。日本がアジアにおいて果たす役割、または相互理解の必要性を将来の子どもたちに伝える一つの場として教育現場がありその担い手が教員である。このプログラムを通じてこれまでの認識の低さを打開し、教育現場に新たな革新的風を吹き込む人材の育成を強く意識した。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、国際文化交流と環境教育を基軸として、将来教員を目指す学生が、国際文化交流及び環境教育の重要性を認識し、それを生かした教育現場作りを心がけることであり、その上で自身の専門性や社会性を拡大し、異文化マインドを創出することである。現在の教育現場の視点から、我が国は、アジアの国々についての理解、例えば世界文化遺産の歴史的意義や文化・環境教育の現状など、アジアの一員として認識すべきことが断片的にしか理解されていない。日本とアジアの国々が、経験や認識を相互に交換し合うことで理解を深め、これからの環境教育の在り方、アジアの在り方を考えることが可能となる。日本がアジアにおいて果たす役割、または相互理解の必要性を将来の子ども達に伝える場として教育現場があり、その担い手が教員である。本研究課題を通じて、教育現場に新たな革新的風を吹込む人材育成を強く意識した。

本研究においては、英語と理科及び環境教育を中心に、諸外国の国際理解と異文化理解を目的とした異文化マインドの

創出を探る。英語を教える教員はもとより、他の教科を教える教員も、「**英語が使える日本人**」として育成されることが必要であり、更に、**国際理解や異文化理解ができることが必要**である。未知のものに触れることで、教師を目指す学生の探究心を育て、教壇に立った場合も**教育現場とその教育自体を知ろうとする心構えを築く事**ができると思われる。

3. 研究の方法

本研究においては、特に英語と理科に焦点を絞り、ベトナムハノイ市ロモノソフ初等中等高等学校、大韓民国サンミョン中学校、中国安徽大学において、国際交流と異文化理解を目的とした国際教育実習を実施し、日本の将来の教育を支えることになる教員志望学生および大学院学生の**国際的視野の拡大、異文化マインドの創出、そして国際語としての英語の運用能力の増強**を図った。英語を教える教員はもとより、他の教科を教える教員も、文部科学省が推進する「**英語が使える日本人**」として育成されることが必要であると考えからだ。国際教育実習の具体的方法としては、教員と学生が当該校を訪問し、パワーポイント資料や実際の道具を用いながら、児童と生徒を対象とした授業を行った。理科の場合は、実験器具等も使用した。日本語・日本文化の場合は、日本文化を解説するための小道具を持参して実施した。さらに教員もモデル授業および招待講演を行った。帰国後、国際教育実習報告会を実施した。

4. 研究成果

将来の日本人を育成する任務を担う教員は、**国際語である英語を運用できる**のみならず、**国際理解、異文化理解ができる**ことが必要である。国際教育実習を通して、また未知のものに触れるというこ

とで、教師を目指す学生が**自ら知ろうとする探究心**を育て、教壇に立った場合も常に変化し続ける教育現場とその教育自体を知ろうとする心構えを築く事ができたと思われる。現在の**国際関係の密接さ**を理解し、自らの社会的視野を広げ社会教育に生かすことで**世界平和を**考えていくことにつながった。また**他国の人々とコミュニケーション**をとることで**人間性の向上**を図り、**宗教の違い、文化の違いを尊重する異文化理解マインド**を育てることができたと参加学生が報告している。

特に英語教員を志望する学生にとって、アジアの国々で行われている**英語の授業がほとんどすべて英語で行われている**こと驚き、感銘を受けたことは、大きな収益であった。かつて明治時代に夏目漱石が福岡の中学修猷館（現福岡県立修猷館高等学校）を文部省の命で視察した際に、当時の小田教諭が英語の授業を英語で行っているのを観察し、高く評価したという記録がある。参加学生は、**アジアの国々の英語教育の実態**と今の日本の英語教育の中で、英語の授業がほとんど日本語を通して行われ、英語をあまり使わない教員が多いという現状とを比較することができた。学生の報告書から一部を引用する。「英語の授業の実態とその効果：今回訪れたロモノソフ学校は小中高一貫校であり、**小学1年生から英語の授業が必修化**されていました。私が実習させていただいたのは小学6年生から日本の高校3年生にあたる12年生でした。授業を見学する中で生徒の学習意欲が高さにはとても驚きました。生徒の反応がよく、何度も生徒自身が黒板に立つ光景も見られるなど、授業全体に活気に包まれていました。これは生徒自身が英語の授業に必要性を感じ、自ら取り組

もうとしているからではないかと思いましたが。次に、**英語の授業はすべて英語で行われている**ということです。**英語の先生はもちろん、小学1年生も英語の時間は英語のみで活動します。**文法指導などもすべて英語で行っており、生徒はこの指導を12年間受けています。すべて英語で行われるということは、それだけ多くの英語に触れる機会が多いのです。それに加えて、生徒の積極性があるので生徒は英語を習得することができているのだと思います。ベトナムにとっても日本にとっても英語の習得が難しいことは同じです。日本でも、英語学習に対する生徒の意欲の育成と多くの英語と触れる機会をつくるのが大切だと感じました。」願わくば、日本においても、少なくとも、中学校、高等学校を卒業するまでには、すべての日本人が外国人に出会っても、臆することなく**国際語である英語**でスラスラとコミュニケーションが取れる**マインドと実力**を備えている日が来ること、そして大学を卒業するまでには、専門的な分野で堂々と英語を使いこなし、英語をスムーズに読み、書き、聴き、話し、**自文化と異文化を理解し、世界の人々と仲良く、地球の発展に貢献できる人材**となって、それぞれの分野で活躍していただきたいと願っている。本プロジェクトに参加したすべての学生は、必ずそのような人材となって羽ばたくものと信じている。国際教育実習に使用したパワーポイント資料および参加学生による日誌と報告書の総集編をCD版にて発行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

谷口雅基、趙京玉、高校における英語科

の教材研究：中国人民出版社の高校英語教材を中心に、*Quest: Studies in English Linguistics and Literature*、西南英語英文学研究会、査読有、特別号2013年、pp.69-76

Masaki Taniguchi, Jane Setter, A Pilot Study: Teaching of Japanese Rhythm to Vietnamese Learners、英語音声学(English Phonetics)、日本英語音声学会、査読有、第18号、2013、pp.159-166

J. Zhao and Masaki Taniguchi, An Analysis of Chinese EFL Learners' Intonation: Focusing on the Fall-Rise Tone、日本英語音声学会、査読有、第17号、2012、pp.23-31

Yusuke Shibata and Masaki Taniguchi, Use of Multimedia PDF in Teaching and Learning English Pronunciation, Rhythm and Intonation、日本英語音声学会、査読有、第16号、2012、pp.15-19
道法浩孝、蒲生啓司、伊谷行、地域及び自然環境を基盤とした土佐の環境教育教材開発力、授業実践力の育成―、高知大学教育実践研究、26、2012、pp.149-158

Masaki Taniguchi, Jane Setter, Sean Fullup, and Chris Golston, Assessing Intonation in the Spontaneous and Scripted Speech of Native and Non-Native Speakers of English、Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences、査読有、2011、p.101

Yusuke Shibata and Masaki Taniguchi, Effect of Connected-speech-phenomena-and-prosody-centred Exercises on the Oral Production of Japanese Learners of English、日本英語音声学会、査読有、第14/15号、2011、pp.201-208

〔学会発表〕(計29件)

Masaki Taniguchi and Jane Setter, Teaching Japanese Rhythm through Haiku、The 15th Joint Seminar on English Phonetics in Seoul/2014、査読有、Seoul National University、(2014/03/17).

Young Shin Kim、Yusuke Shibata、Masaki Taniguchi、Perception of Korean Denasalized Nasals by Japanese Speakers、The 15th Joint Seminar on English Phonetics in Seoul/2014、査読有、Seoul National University、(2014/03/17).

Masaki Taniguchi, Learning Japanese Rhythm through Haiku、招待講演、Lomoxop School, Vietnam

(2014/03/05-11)

Masaki Taniguchi、Teaching of Japanese Rhythm to Vietnamese Learners、招待講演、Applied Linguistic Circle, University of Reading (2014/02/27-28)

吉井容子, 吉岡健一, 中城 満, 蒲生啓司, 天体の位置関係をとらえるための指導法の改善 第6学年「月と太陽」における教具の工夫, 日本理科教育学会四国支部大会, 鳴門教育大学 (2013/12/07).
武内 崇, 草場 実, 蒲生啓司, OPPシートを用いた理科学習指導が児童のメタ認知活性化に及ぼす効果 小学校第3学年理科「明りをつけよう」を事例として, 日本理科教育学会四国支部大会, 鳴門教育大学 (2013/12/07).

久米麻意, 谷岡亮輔, 山下太一, 松山大起, 三村一成, 間處耕吉, 吉岡健一, 中城 満, 蒲生啓司, 修士課程での理科教員養成『実習・演習コアカリキュラム』における授業研究, 日本理科教育学会四国支部大会, 鳴門教育大学 (2013/12/07).
蒲生啓司, 道法浩孝, 教員養成課程における「科学技術教育コース」の設置とカリキュラム開発, 日本理科教育学会四国支部大会, 鳴門教育大学 (2013/12/07).
道法浩孝, 蒲生啓司, 科学技術教育コースにおける教材開発へのものづくり技術の導入, 日本化学会中国四国支部大会, 広島大学 (2013/11/16-17).

Masaki Taniguchi, Y. Shibata, A. Yamada、Effect of Gymnastics and Dancing in the Learning of English Rhythm and Intonation、日本英語音声学会九州沖縄四国支部第12回研究大会、査読有、高知大学、(2013/11/09)

Masaki Taniguchi、Learning English Pronunciation, Rhythm and Intonation、招待講演、中国安徽大学(2013/09/11-12)

Masaki Taniguchi、Japanese Learners' Weak Points in English Pronunciation, Rhythm and Intonation、招待講演 UCL Summer Course in English Phonetics、University of London、(2013/08/14)

楠瀬弘哲, 川澤輝洋, 吉岡健一, 中城満, 蒲生啓司, 授業実践力を育成する理科教育支援システムの構築, 日本理科教育学会第63回全国大会 査読有, 北海道大学, (2013/08/10-11).

間處耕吉, 吉岡健一, 中城満, 蒲生啓司, 高知 CST 活動の現状と課題 CST の活動実態及び意識調査より, 日本理科教育学会第63回全国大会, 査読有, 北海道大

学 (2013/08/10-11).

宮本友里奈, 蒲生啓司, 理科教育における科学的思考の客観的なルーブリック評価の研究, 日本理科教育学会第63回全国大会, 北海道大学 (2013/08/10-11).

蒲生啓司, 道法浩孝, 理科と技術科の連携による科学技術教育教員養成カリキュラムの構築, 日本理科教育学会第63回全国大会, 北海道大学 (2013/08/10-11).

Masaki Taniguchi、Introduction of Bi-Mora and Quadric-Mora Timing to the Teaching of Japanese Rhythm to Vietnamese Learners、日本英語音声学会第18回全国大会、査読有、愛知県犬山市犬山館ホテル、(2013/06/08).

三上志穂里, 津野夏海, 三宅優子, 蒲生啓司, 道法浩孝, 伊谷 行, 中城 満, 中山間地中学校の理科教育支援を通じた授業実践力の育成、日本理科教育学会四国支部大会、査読有、香川大学 (2012/12/15).

津野夏美, 三宅優子, 三上志穂里, 道法浩孝, 蒲生啓司, 伊谷 行, 理科教材開発及び授業研究におけるものづくり技術の導入、日本産業技術教育学会四国支部大会、査読有、香川大学 (2012/12/08).

草場 実, 蒲生啓司, 高等学校化学におけるメタ認知活性化のための学習指導に関する実践的研究、日本化学会西日本大会、査読有、佐賀大学 (2012/11/10-11).

②① 蒲生啓司、理科教員養成と教員研修の取組みと課題、日本化学会西日本大会、査読有、佐賀大学 (2012/11/10-11).

②② 蒲生啓司、高知大学における理科教員養成拠点構築事業の取組みについて、平成24年度日本教育大学協会研究集会、査読有、鹿児島大学 (2012/10/06)

②③ 道法浩孝, 蒲生啓司, 伊谷 行, 教員養成における地域資源を基盤とした環境教育プログラムの開発、日本教育大学協会研究集会、査読有、鹿児島大学 (2012/10/06) .

②④ 宮本友里奈, 高橋ゆい, 山中考一, 蒲生啓司, 理科の授業で科学的思考は身につくのか 評価法の研究, 日本理科教育学会第62回全国大会、査読有、鹿児島大学 (2012/08/11-12)

②⑤ 大鷲竜午, 吉岡健一, 玉野井英二, 中城満, 蒲生啓司, 高知県における中核的理科教員養成の課題と方策 小学校教員を中心に, 日本理科教育学会第62回全国大会、査読有、鹿児島大学 (2012/08/11-12)

②⑥ 宮本友里奈, 前田悠佑, 上妻光平, 大西祐子, 津野夏海, 邊見由美, 山崎梨加, 浅野真澄, 矢部喜久, 伊谷行, 道法浩孝, 蒲生啓司, 地域資源を活用

した『土佐の環境教育』の実践、日本理科教育学会四国支部大会、査読有、松山 (2011/12/10).

- ⑳ 宮本友里奈、前田悠佑、上妻光平、大西祐子、津野夏海、邊見由美、山崎梨加、浅野真澄、矢部喜久、伊谷行、道法浩孝、蒲生啓司、地域資源を活用した『土佐の環境教育』の実践(2)、日本理科教育学会、査読有、島根 (2011/8/20-22).
- ㉑ 大島竜午、吉岡健一、蒲生啓司、地域の中核的理科教員養成のための授業研究に関する一考察、日本理科教育学会、査読有、島根 (2011/8/20-22).
- ㉒ 大島竜午、吉岡健一、蒲生啓司、高知 CST 養成プログラム初年度の取り組み 高知 CST プログラムの基盤構築と高知 CST 養成プログラムの開発を中心に、科学教育学会北陸甲信越支部大会、査読有、上越 (2011/6/11).

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 雅基 (TANIGUCHI, Masaki)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：90163633

(2) 研究分担者

蒲生 啓司 (GAMOH, Keiji)

高知大学・教育研究部総合科学系・教授
研究者番号：90204817

(3) 連携研究者
()

研究者番号：